

四月二十三日

人間の身体というものは、なんとも不自由なものだ。色々なプロジェクト他のスケッチに明け暮れしていたら、もう一週間近くこのメモをつけ忘れていたのに気がついた。三島由紀夫が「作家論」で述べていた事だが、認識と創造（それ程大仰なもの言いはなく、むしろ遊びと呼んだ方がよい）はコインの裏表の関係であり、幸せに混合することはない、というような事。スケッチ（エスキス）をしていれば記録も忘れてしまい、記録を克明と言わずとも定期的につけていけば、スケッチは少なくなる。

今度、ホトホト解った事でもあるが、建築を離れて（具体的な与件がすでに存在している案件を離れて）、白紙を前に何かを描こうとすると、これ位困難な事はない。禅の修行僧が公案に対するに禅画を持って対する、あるいは仏教的無の様相をイメージするに、絵、あるいは書の技術を持って対しようとするのが殆ど同時に描かれるものなのを思い起こしたりもした。言葉による思索の過程は、スケッチや絵による考案とは数層倍の困難さを持つ。思考の精密さが異なる。

ただし、白紙を前に建築的与件（仕事と言っても良い）も何も何かを描こうとする絶望感と比較すれば、言葉は容易な気もしないではないが、私のメモ程度でそんな事いうのも少々どころでは無く大いにおこがましい。いずれにせよ、言葉をもってするにせよ造形でするにせよ、ある一定の視えやすい水準を超えたいと願

う時に、この困難さは出現する。万人、誰もこの定理から自由な者はいない。

「住宅」に対する方法をようやくにして考えついた。

一、設計図書は生産・流通の指示書である原則に立ち返り、生産の方法、流通の方法を具体的に指示する図、又は書式を附する。
二、一つ一つの住宅に対して依頼主の力量、予算、他によって設計を出発させる前に、戦術を明快にする。それも設計図書に記録として残す。

三、設計、流通設計、生産設計の過程を公開する（依頼主の了解を得て）。その過程を介して、依頼者が住宅設計に参与する径を開ける。

四、究極的には自分の身のまわりは自分で作るう、という開放系技術論の一部として成立させるが、開放度という規準を設け、段階を設ける。

五、日本の家づくりスタンダードである事を認識する（スタッフ教育）。

四月二十四日

今日は世田谷村に第二期工事の鉄材が運び込まれる予定になっている。この工事で私の世田谷村での仕事場の空間を拡充する。

地下の作業所には本格的な屋根が架かることなる。屋根は船底の如くに下にゆるくカーブしているから、船底を、水の内から見上げるようなスペースが出現する事になる。この空間は強く重いものになるだろう。南面して、西際の壁面から、高い明るい光が糸状に指し込む。地中深い感じをテフォルムしている。地下の一部は天井に湾曲したコルゲートシートが露出している。床は石張

りにしたいのだが、金が足りぬかも知れない。何とか安く石を手に入れたい。地下の一部には床暖房を施さなくてはならないだろうな。新築となる一階二階部分は南だけが開いた少しゆがんだ箱になる。南からの光は地下室まで指し込むように工夫される。壁、屋根、床、開口部枠、全て鉄を使うが、鉄という材料と自然をいかに馴染ませるかの、幾つかの実験を試みる。依頼主、その他の打ち合わせも、世田谷村で1/2は行う事になるので、それなりに空間を用意したい。小空間ではあるが、私の鉄の体験を投入して、次の段階に進みたい。

この二期工事に関しては、沢山のスケッチを描いたので、いざ絵日記の方で全て公開する。